

8月25日(火) 2学年 「丹BAL台湾」

2学期最初の探究活動は、2学年の丹BAL台湾で始まりました。

『台湾とは何か』を読むのが春からの課題ですが、この夏、第3章から第7章までを38人(または36人・37人)が数ページずつ担当してまとめてきました。この日は、章ごとに7~8人が集まってそれぞれの読んできた箇所の内容を報告しました。次回は、それらをさらにまとめて要約し、クラスで発表する準備に入ります。



8月25日(火) 2学年 探究Ⅱ

2学年初の探究コースでは、夏休みのフィールドワーク、文献やインターネットで学んできた内容をまとめました。

石生の水分れ公園にフィールドワークに出かけた班もありました。

今月中に班ごとにポスターを仕上げる予定となっています。

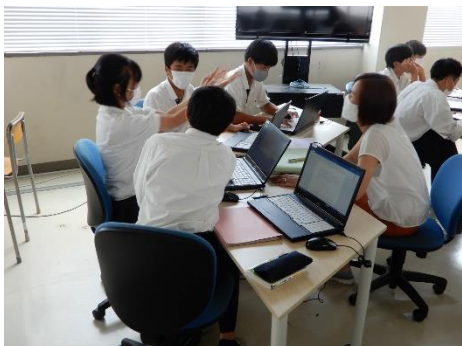
来週は環境班が大阪商業大学の原田禎夫先生をお招きして「プラスチックゴミ問題をめぐる事情について」というタイトルでお話を伺います。



8月26日(水) 1学年 丹BAL 1

5時間目には知の探究コースが、フィールドワークのまとめをしました。生徒だけで訪問した施設や事業所もあったため、担当の先生方に報告し、新たな課題を発見していたようです。ちーたんの館には3つの班が訪れ、観光資源としての活用、広報のありかたなど、それぞれの視点から話を聞いてきています。

6時間目は普通クラスが、ここでも班ごとに集まって、夏休みの活動をまとめていました。「丹波の魅力のおすそわけ」講座の先生方からいただいた課題に取り組んでいる班や、インターネットで情報を集めてきた班もあり、進捗状況もまちまちですが、次回以降、クラスのなかで自分の班がどんなテーマで取り組んでいるのかを報告する機会をもちます。9月末には、「おすそわけ」2回目の講座を予定しており、どんなアイデアが生まれるか楽しみです。



「肌ざわり」を信じて。

研究推進部 吉田 究

戦後75年目の8月9日を長崎で、終戦の日の15日を広島で迎えました。

広島は、ハチドリ舎という小さなカフェで、池谷薫監督の映画「蟻の兵隊」を見るのがメインの目的。監督を囲んでの定員15名だけの上映会は、「疎にして密」な時間でした。

映画は、終戦後、中国山西省に残留七軍の命令で残留させられ、4年間、中国国民党軍の部隊として共産党軍との戦闘を強いられた残留日本兵・奥村和一さん（2011年に87歳で没。）を追った2005年のドキュメンタリー映画です。

上映前、池谷監督は「これは狂って撮った映画です」と仰ったのですが、映画の中で終始理知的、理性的な奥村さんが、戦地（山西省太原）を訪れ共産党軍の元兵士と話す中で、どんどん彼の中の軍人が、狂気が蘇るのです。それは見ていてとても不思議なひとこまでした。

そう。理知的な奥村さんだからこそ、戦争というものを客観視できているようにも見えていたのですが、こういう場面で何か正体の分からないものが彼を襲ってしまう。誰よりも戦争のことを知っているはずの彼が、映画の中で、「戦争のことは何も分からない」と呟きます。渡辺白泉の俳句「戦争が廊下の奥に立つてみた」じゃないですが、鶴（ぬえ）のような、実態の分からない戦争というものの不気味さを感じます。

「狂う」と言えば、私、今週末、富山県で芝居を見ます。標高1,000m、人口900人の利賀（とが）村という小さな山間の集落。劇団SCOTによる、鈴木忠志演出「世界の果てからこんにちは・Ⅱ」です。

鈴木は、今春亡くなった別役実や白石加代子らと一緒に早稲田小劇場を立ち上げた日本が世界に誇る演劇人なのですが、彼の芝居はなぜか、それがギリシャ悲劇であろうが日本の古典であろうが、ほぼ常に精神病院が舞台なのです。私も普段生活をしていて、時々（頻繁に？）気が狂いそうになる瞬間があるのですが、彼の舞台を見ていると、果たして自分が狂っているのか、それともこの世界の方が狂っているのか、そんなことを考えさせられ（そして（私などは）救われたりもし）ます。（あるとき、私が夕食の食卓で「普通**だよなあ…」などと愚痴をこぼしていると、小学生の息子に「みんな普通じゃないからしょうがないんじゃないの？」と言って窘められました。嗚呼…。）

先日、医療系の大学を受験する3年生の小論文を指導していたのですが、課題文として、近年、人が自宅ではなくて病院で死ぬようになり、日々数々の死を看取る医療従事者と、平均寿命も伸び、ますます死から遠ざかる一般人の感覚とのギャップが広がっていると述べた文章に触れました。死が遠くなり、戦争もイメージできない私たちが、新型コロナ禍で感染者や「自粛要請」に従わない人々に対して心無い誹謗中傷を繰り返したり、軽々しく「死ね！」と言ってみたり、8月15日の靖国神社に軍服のコスプレをして集ったりするのです。「反知性主義」という言葉がありますが、そこでいう「知性」というものの守備範囲（？）が、昨今どんどん拡大しているように見え、（やはり「鶴」を前にしたような）恐怖を覚える私です。

最後の最後に信頼できるのは、自分自身の感覚、肌ざわりだと私は思っています。それを自分がどれだけ信じられるか。自分自身の肌ざわりさえ信用できないようでは、末期症状だと言わざるを得ません。

探究活動は（必ずしも）知識ではないのです。感覚です。経験です。体感です。私も（今年は行けませんでした）8月6日のヒロシマ、9日のナガサキ、そしてヒロシマでの15日という「時間感覚」を（「原爆投下後75年は草木も生えない」と言われたその戦後75年目のヒロシマ・ナガサキで）体感することができ、非常に貴重な体験になったように思っています。



左は、
8月16日、
朝の広島。
右は、
映画会の様子。